

令和七年（二〇二五）三月二十七日発行
『大倉山論集』第七十一輯 抜刷
（公益財団法人 大倉精神文化研究所）

東亜同文書院生たちが見た二〇世紀前半のアジア

加 納 寛

東亜同文書院生たちが見た二〇世紀前半のアジア

加 納 寛

目 次

はじめに

一 東亜同文書院とは

二 本日のお話の前提として―大倉邦彦先生の対中観から見た日中関係

三 「大旅行」とは何か？

四 東南アジアにおける大旅行と日本人社会

五 欧米への見方とアジア主義の影響―香港を例として
六 日本人の旅行先としてのアジア―雲岡石窟を例として

七 日本化する土地としてのアジア―台湾の神社
八 大旅行を通じて見る学軍関係

おわりに―『大旅行誌』の史料的价值

はじめに

このたび、公益財団法人大倉精神文化研究所と愛知大学との公開講演会として、このような由緒ある素晴らしい講堂において発表の機会をいただきましたことは、たいへん光栄なことと存じます。

私は、愛知大学副学長、東亜同文書院大学記念センター長を務めております加納と申します。本日はよろしくお願ひ申し上げます。



愛知大学におきましては、その直接的な前身とも言える東亜同文書院の理念や歴史を継承するため、学内に東亜同文書院大学記念センターを設置し、弊学所属者の東亜同文書院研究を推進しております。と申しましたが、東亜同文書院について専門的に研究している者は限られますので、それぞれの専門研究と関連させながら東亜同文書院についても副次的に研究していただくような方向性をとっております。かく申し上げている私自身も、専門は東南アジアのタイの歴史の研究でして、この十年ほどは科学研究費補助金をいただいて第二次世界大戦中の日本によるタイへのプロバガンダを中心に研究をしておりまして、東亜同文書院研究としては主に戦前の東南アジアと東亜同文書院生の大旅行との関わりを論じさせていただいている次第です。本日は、そのようななかで見えてきた、東亜同文書院生たちの目に映った二〇世紀前半のアジアについて、アラカルト的にお話しさせていただきたいと存じます。

一 東亜同文書院とは

まずは、前提として、東亜同文書院の歴史を簡単に振り返っておきたいと思います。詳しくは、参考文献表に挙げております藤田佳久教授の御著書などをご覧くださいますと、ありがたいです。

そもそも東亜同文書院の源流は、陸軍将校から転身して中国との貿易の重要性を説き、その人材を養成していた荒尾精から発しています。荒尾精は、尾張藩士の家庭の出身で、いま東亜同文書院の流れを組む愛知大学が愛知県に拠



【図1】 東亜同文書院設立の三先哲
(左から、荒尾精、近衛篤磨、根津一)



【図2】 在りし日の東亜同文書院

点を置いていることに、不思議な御縁を感じるところです。荒尾精は、国際商人として活躍していた岸田吟香の協力を得て私塾「漢口楽善堂」を、さらに一八九〇年に上海に「日清貿易研究所」を設立し、日清間貿易に従事する人材の養成に努めました。荒尾は、残念ながら一八九六年に若くしてこの世を去りましたが、その後、その志は、同じく陸軍将校であった盟友の根津一が受け継ぎ、近衛篤磨公爵が会長をつとめる半官半民の東亜同文会によって、一九〇一年に上海に設けられた東亜同文書院へと結実するのです。東亜同文

書院は、一学年につき概ね百名程度の学生を、各府県からの県費生を中心に受け入れておりました。実践と原理を組み合わせた独特の教育によって、実業界はもちろん、外交、報道、教育、研究などの分野に多くの優秀な人材を輩出しました。一九三九年には大学に昇格しましたが、一九四五年、国際情勢の推移によって約半世紀にわたる歴史を閉じました。その後、東亜同文書院大学の教員や学生を中心に、外地にあった様々な高等教育機関の教員や学生も受け入れて、一九四六年に設立されたのが、愛知大学でした。本当は「東亜同文書院大学」の名で再興したかったようですが、GHQに許可されなかったと言います。このような歴史によって、愛知大学では、その前身にあたる東亜同文書院の研究が続いているわけです。

二 本日のお話の前提として―大倉邦彦先生の対中観から見た日中関係

本日は、このような歴史をもつ東亜同文書院生の視線に映った二〇世紀前半のアジアについてアラカルト的にお話しするのですが、その前提として、東亜同文書院のご出身で、ここ大倉山に大倉精神文化研究所を開かれ、東洋大学の学長も務められた大倉邦彦先生の対中観を見ておきたいと思えます。ここでは、大倉先生が一九二五年から一九四五年にかけて書かれた『感想』から、そこに登場する中国（大倉先生の書かれた原文では「支那」）への見方を見ていきたいと思います。

大倉先生は、一八八二年に佐賀県にお生まれになり、佐賀中学から一九〇三年に東亜同文書院に進まれました。書院の三期生になります。一九〇六年に大倉洋紙商行に入社され、一九一八年に社長に就任されます。ビジネスの一方、精神文化の興隆にも意を砕かれ、一九三二年には大倉精神文化研究所を、この地に開所されました。先ほど講演会の

『感想』にみる大倉邦彦先生の対中観

感想	年月	西暦	ページ	番号	分野	内容
5	S4/2	1929	85	265	政治	昔、支那の禹は洪水を防いで国民を危機より救った。今は邪説横流して人心を侵して居る。
10	S9/2	1934	187	518	思想	若し現代仏教が、皇国精神を忘れて成仏道をのみ説くならば、それは蛇の殻であり、遂に支那、印度と同様に国の恨みを招来するであらう。
10	S9/2	1934	189	521	思想	印度や支那に仏教は滅びたが、皇国にのみ残存する理由は、皇国化したからであるのに、学者は彼地に仏教の種子探しを始めて居る。
11	S10/2	1935	210	599	思想	支那、西洋崇拜時代に、その先端を歩いた人々々は、その当時に名を成し、後世からは冷笑された。外国文化の崇拜時代に、矢表に立って民族の立脚点を確守せんとした人々は、その時代には冷笑され、後世に慕はれた。
14	S10/4	1935	259	820	思想	676と同じ。
18	S10/8	1935	263	841	政治	天皇の絶対尊厳を冒瀆したと言って、支那の為政者に対し、重大抗議を申込んで一歩も引かない態度を示して居りながら、我国の学者達の、天皇機関説に対しては、事なかれ主義で不問に付すとしたら、奇怪千万、奇怪千万。
12	S11/2	1936	226	676	思想	支那の儒教は日本に渡来して、日本儒教となり、印度の仏教は日本に渡って、日本仏教となつて、皇運扶翼に貢献した。欧米の学問も宗教も、日本に来ては、国体自覚の中に消化されなければ、皇運の肥料とならぬばかりでなく、却って害毒となる。
32	S11/10	1936	278	948	政治	英国はその自治領と植民地より日本の商品を撃退する時には勇往邁進して、凱歌を奏するや直ちに親日を唱へ出す。そしてその親日によって支那の既得権を確保せんとする狡猾さに感づかないとは惜けない。
36	S12/2	1937	283	983	政治	殺される事さへあるから勝になる位の事はあり得る。脅迫されて約束する事はあり得るにしても、それを公に実行する事は可笑しい。支那人は何所迄も大善を捨てて小善を尊ぶと見える。
44	S12/10	1937	291	1027	政治	ここ迄なるのも、支那の自棄自得だ。徹底懲罰しなければ、反省すまい。それでこそ列強も、蔭の援助が無駄なことを知って、手を引くであらう。
45	S12/11	1937	292	1031	政治	事変に遭遇すると矢庭に精神総動員が叫ばなければ、心配になって来た。支那の兵力を恐れるのではない。恐るべきは個人主義と自由主義と功利主義である。
48	S13/1	1938	296	1049	政治	支那事変の結果は画期的変化を齎すに決つてゐる。国民は、躍進日本の自覚と、中外に果すべき任務と、之に相応する抱負とを持たなければならぬ。
51	S13/4	1938	297	1056	政治	支那に於ける日本の現勢力を活用する対欧米外交に成功しなければ、日本の進展は永久に阻止される。
52	S13/5	1938	298	1064	政治	今迄の日本人は、日本だけの日本を見てゐたが、これからの日本は、満洲・支那・南洋の三本の足の上にある體である。
53	S13/6	1938	299	1067	政治	支那満洲の天地に、勇躍して民族發展の第一線に立つことは、男子の本懐であるべきなのに、暗闇の隅ツ子に、不平を言ひ乍ら、うづくまゐる人の気が知れない。
56	S13/9	1938	302	1081	思想	個人中心の考へ方が、人生の目的であると思つて居た人々に、国家生存のためには總てを捧げなければならぬことに気付かしたのは、支那事変であつた。支那事変は、東洋平和の建設でもあり、国民教育の建直しでもある。
57	S13/10	1938	303	1088	政治	国際場裡にあって、日本の立場が、如何に不利に陥し入れられ、それが支那事変と相関連して、日本を潰さうとしてゐる事の真相を、国民に知らしめることが、国民総動員に最も良き業である。
57	S13/10	1938	303	1089	思想	支那事変が起つてから、半島人の愛国教育の実は俄然として、効果を生んだと言はれて居る。
58	S13/11	1938	304	1093	政治	支那も援けて、日本に權益も保障して貰はふ。人民戦線側にも肩を持ち乍ら、フランコ政権にも連絡して居るあたり、如何にも英国の狐外交である。
64	S14/5	1939	311	1118	政治	(東亜新秩序の建設において日本が指導的地位に立つことが絶対条件であるという話) 近來の流行は、いやに支那を持上げ過ぎである。それは、外国に対するヂェスチューアの積りか。欧米気兼ねの中に、東亜新秩序の建設が出来る筈はない。
68	S14/9	1939	316	1139	思想	国内の宗教がこのしだらでは、支那に向つての文化工作に声を囁かしても、空家で説法して居るのと同様効能はあるまい。
72	S15/1	1940	320	1157	政治	支那を叩きつけたら、新政権が成立したら、東亜新秩序が建設されると早合点してはならぬ。東洋に於ける英米の優先的占有を排除して出直さしめることが、新秩序の一步でなければならぬ。
73	S15/2	1940	321	1163	政治	日清戦争は勝利を得たが、三国干渉によって失敗した。支那事変は我方に勝利を得たが、米国の圧迫によって恥辱に終らしめてはならぬ。
75	S15/4	1940	323	1172	政治	斎藤代議士の言動の可否さへ容易に決定が出来ないやうでは、支那事変処理の大問題を論議する資格を疑はれても仕方あるまい。

前に理事長の平井誠二先生に建物を御案内いただいたのですが、様々な理想が体现された、すばらしい建物ですね。一九三七年には東洋大学学長に就任されます。

さて、大倉先生の『感想』（一九二五―一九四五）に登場する中国は、一九三六年までは思想的な話題が中心となっておりま。一九三六年を境に、話題は政治的なものを中心になってまいります。とくに、反英的な意識と、日本人の「支那」への勇躍、そして東亜新秩序において指導的役割を果たすべき日本についての言及となっています。ここからは、東亜同文書院の出身者として中国に深い理解を有する大倉先生の視線の変化を感じることができます。それは、日中関係の変化とも、大いに関係するものでした。このような前提をもとに、東亜同文書院生の目に、二〇世紀前半のアジアはどのように映ったのか、様々な話題で見ていきたいと思います。

三 「大旅行」とは何か？

さて、東亜同文書院教育は、二つの顕著な特徴を持っていました。それは、実務的な中国語・英語の習得と、「大旅行」と呼ばれるフィールドワークです。

「大旅行」が書院教育に導入される前には、現地の商業慣習調査が行われており、これが一九〇七年から一九〇八年にかけて『支那経済全書』全十二巻として結実します。さらに、二期生の五名が、外務省から清国西部・新疆一帯におけるロシア勢力の浸透状況調査を委託され、見事にその調査を全うしたことによって、外務省から謝礼三万円が送られ、それを原資として書院教育の一環として一九〇七年より「大旅行」が開始されることになったのです。「大旅行」は、最終学年に、数名からなる班を編成し、学生のみで中国を中心とするアジア各地を数か月間にわたっ



【図3】東亜同文書院における中国語の授業



【図4】東亜同文書院における「大旅行」の服装



【図5】毎年刊行された『大旅行誌』

て実地に調査していく、書院教育の締めくくりとなるような一大イベントでした。その結果は『調査報告書』として、卒業論文にまとめられます。また、大旅行の感想等は、文集『大旅行誌』として、毎年度刊行されました。以下、その「大旅行」の記録、『大旅行誌』をもとに、書院生のアジアへの視線を紹介していきます。

四 東南アジアにおける大旅行と日本人社会

まずは、大旅行が、私が専門としている東南アジアを例として、どのようなコースをたどり、そこから書院生たちがどのようなアジアを見ていたかを観察しておきたいと思います。

大旅行において、東南アジアを経由したルートは、全六六二路線中五四路線（約八％）に及びます。

実は、二〇世紀前半期において、日本から見た東南アジアの位置付けは、大きく変化していきます。一九一〇年代初頭には、「南進論」が盛んになり、東南アジアへの関心が高まります。一九二〇年代には、日本と東南アジアとの経済関係が、急速に本格化していくことになりました。

書院生の視線にも、そうした変化が伺われます。時代を追って、観察してまいりましょう。

（一）東南アジアへの大旅行調査の拡大初期（一九一〇～一九一九）

まず、一九一〇年代においては、中国大陸を中心としていた大旅行が、東南アジア地域へも拡大していきました。最初に東南アジアへの大旅行に出たのは、一九一〇年の第八期生でした。彼らのルートは、ベトナムのハイフォンからハノイを経由して雲南に入るルートであり、これは東南アジアを経由してはありますが、むしろ当時における雲南に入るための最も適切な方法であり、中国旅行の一部として東南アジアを通過したと表現した方が妥当かもしれせん。このルートは、その後頻繁に用いられます。

次に東南アジアを経由したのは、第一五期生で、ビルマに入っています。彼らのルート選択は、雲南において発症した病気によるもので、病身にも耐えられるルートとしてビルマ経由を現地で選択したものであり、偶発的なものと

言えるでしょう。

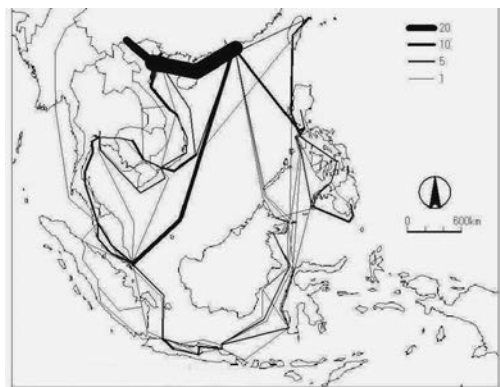
東南アジアへの大旅行は、中国大陆の過酷な大旅行とは異なり、一貫して鉄道や航路、バスや自動車を多用するものでしたので（広大な中国大陆に比較して、交通路が発達していたといえるかもしれませんが）、病気の場合にも対応できたものと考えられます。

さて、当時の書院生たちの目には、東南アジアにおける日本人の姿も多く映っています。彼らの記録によく登場するのは、主に写真店等の小規模商店や「からゆきさん」（日本から海外への出稼ぎ娼婦。書院生の記述には「嬢子軍」として登場することが多いです）の進出です。また、この時期の書院生たちが経由していたハイフォンやハノイでは、日本旅館への言及も多く登場します。ハイフォンの日本旅館は、岸田國士の戯曲『牛山ホテル』のモデルとなった石山旅館で、女将は一九二〇年の領事館設置までは「石山領事」と呼ばれるほど在留日本人の面倒を見た「女傑」だったといえます。東南アジアの他の地においても、書院生たちは在留日本人にかなりお世話になりながら、大旅行を経験しています。彼らの記録からは、一九一〇年代末までに、東南アジアに広範な日本人分布が完成していることが伺われます。

一方、書院生たちの記述には、日露戦争後の「一等国」意識の拡大も伺われます。この意識は、その後も続いていることとなります。

（二）東南アジアにおける大旅行調査の充実期（一九二〇～一九三二）

一九二〇年代には、大旅行の東南アジアを経由するルートが、量的に拡大していきます。とくに一九二七年の二四期生による大旅行では、一五ルート中六ルート（四〇％）が東南アジアを経由しています。一九二八年の二五期生も、



【図6】東南アジアにおける路線図

一五ルート中五ルート（三三％）が東南アジアを經由します。經由地としては、ベトナム、マレー半島、ジャワ島、ボルネオ島、ルソン島に集中しています。

書院生たちの記録には、一九二〇年代の東南アジアにおける日本人社会の様子も伺われます。そもそも、東南アジアを經由した各班の記録においては、日本人以外の華僑や現地人、宗主国役人との接触に関する記述が少ないのです。この点が、中国大陸における大旅行と、様相が異なるところです。その背景としては、この時期が第一次世界大戦後の日本の経済進出期に当たり、商社等の大企業社員が海外に赴任していき、東南アジア各地において東亜同文書院の先輩たちを頼ることができるようになったことも大きな要因と言えるでしょう。一九二〇年代の東南アジアにおける日本人社会は、書院出身者のようなエリート層の大企業社員からなる「グダン族」と、それ以前から東南アジアにおいて零細商店等を営む「下町族」とが分離していく時期にあったことが、書院生の記録からも浮かび上がります。

一方、一九二〇年代には、「からゆきさん」との遭遇体験の記録が減少していきます。それに代わって、「洋妾」になつたりして安定的に外国人の配偶者を得ている日本人女性の姿が描かれます。また、ダバオ領事館管内のフィリピンに渡航する日本人移民の増加は、フィリピンを經由した書院生の記述からも読み取れます。一九二〇年代後半には、済南事件等の影響で書院生のブロンペンでの宿探しが難航したり、ペナンで日本人ボーイコットに遭遇して華僑宿から

「執拗に立退きを迫」られたりするなど、日本の対アジア進出によって生じる摩擦が、華僑の多い東南アジアでも実感されるようになってきます。

（三）東南アジア調査の縮小（一九三二）

一九三二年以降になると、満州事変後の国際情勢によって、大旅行は「制約期」に入っていきます。

書院生の記録からも、植民地勢力や華僑による強烈な排日気運との各地での遭遇体験が描かれるようになります。そうした雰囲気の中かで、日本側官憲に向けられた書院生の怒りや憤りも現れてきます。殺伐としていく状況においても、シヤムは緊張から解放される土地として書院生たちに認識されていたようです。また、安南人の親日ぶりも見ることが出来ます。

このような状況において、書院生たちは東南アジアの人々や社会をどう見ていたのでしょうか。彼らの記述からは、「二等国民」である日本人から、「幼稚」で「怠惰」かつ「低能」な「土人」に対する視線が浮かび上がってしまうのですが、それは当時の日本人の意識をそのまま反映したものと言えましょう。アジアに生きようとする書院生たちにおいても、そのような意識から自由ではなかったことが伺えます。

五 欧米への見方とアジア主義の影響―香港を例として

今度は、舞台を香港に移して、香港におけるイギリスのプレゼンスに対して書院生たちがどのように感じたのかを観察し、書院生の欧米への見方や、アジア主義の影響について見ていきたいと思います。

まず、大旅行初期の大正期から昭和初期にかけては、書院生たちの感想は、イギリスによる香港植民地支配の賛美に溢れています。このような親英的な見方は、一九二五年に広州から始まって香港にも影響を与えた反英運動である五・三〇事件を通して、とくに変化していません。これは、当時の中国におけるイギリスのあり方に、日本のあり方が重ねあわされていたことを物語っているように思われます。

しかし、一九二〇年代末からは、次第にイギリスに対する疑念も見られるようになり、中国人経済力への認識への言及も観察されるようになります。

一九三〇年代半ば以降になると、明らかにイギリスへの批判的な感想が多くなり、イギリスによる支配に対する賛美は姿を消します。一方で、日本の影響力の増大が伺われるようになります。

一九三九年以降は、日本における排英運動の高まりを背景として、中国人民衆と提携して「大東亜共栄圏」建設に心躍らせるような記述が多くなっています。

ここから見ると、東亜同文書院生の香港におけるイギリスに対する見方は、日本におけるアジア主義から見た国際情勢の動きを如実に反映していると言えるでしょう。

六 日本人の旅行先としてのアジア―雲岡石窟を例として

さらに舞台を雲岡石窟に移し、そこを例として日本人の旅行先としての中国大陆の変化について見てみましょう。

一九一〇年代までの書院生たちの記録を読んでいくと、雲岡石窟近傍の大都市である大同を訪問している班はありますが、大同を経由するからといって雲岡石窟を訪問していたわけではないことがわかります。この時期、雲岡石窟



【図7】雲崗石窟での記念撮影。大同の腕の上に乗って撮影するのが定番だった

を訪問している書院生たちは、石窟を調査している日本人研究者を訪問しています。一九一〇年代までは、日本人にとって雲崗石窟は観光地としてはほとんど認識されていなかったのですね。

この状況が一変するのは、一九二〇年に『大同石仏寺』という書籍が刊行され、雲崗石窟が日本の知識人たちに強く印象付けられてからです。一九二〇年代から三〇年代にかけては、大同を経由する書院生たちは、ほぼ必ず雲崗石窟を訪問するようになります。大同からの移動は、馬や驢馬などを借りて、片道二時間以上をかけて移動していました。一九三〇年代には、中国側の政策による観光地化も整備されていきます。一九二〇年代から三〇年代にかけて、雲崗石窟の観光地としての認知が定着していったと言えるでしょう。

一九三七年以降になると、日本軍による占領がなされ、一層の観光地としてのシステム化が進みます。それまでは馬などに乗って片道二時間以上をかけて訪問していた雲崗石窟に、定期観光バスが運行されるようになります。また、大同石仏煎餅などといった定番お土産などが売られるようになっていくなるところが、日本人の「観光」行動やそれに対応した観光地ビジネスを彷彿とさせて興味深いところです。

このように、書院生の約半世紀に及ぶ記録を見ていくと、アジアの観光地化がどのように進んでいったのかも観察することができるようでした。

七 日本化する土地としてのアジア—台湾の神社

今度は、舞台を台湾に移して、日本領となった地域への書院生の視線を見ていきたいと思います。

台湾における神社は、台南に一八九七年に開かれた開山神社や、台北に一九〇一年に開かれた台湾神社など、神社法令に基づいた公的な神社だけで全六八社に及びました。書院生たちがこれらの神社にどのような視線を向けているかを観察し、日本の植民地となった台湾の位置付けに対する書院生たちの意識を探っていききたいと思います。

まず、「大旅行」において台湾を経由した班がどの程度あったかについて見ておきたいと思います。大旅行においては、全ルートの約一二％が台湾を経由しております。ただし、台湾は日本の領土となっておりましたので、書院生たちの台湾への眼差しも、中国大陸とは異なっており、「懐かしの故国」というようなものでした。

一九一〇年代には、書院生たちは、台北に設置された台湾神社や、後に台南神社となる「北白川宮殿下御遺跡所」、開山神社を訪問しています。これらの記述には、日清戦争の結果として日本に割譲された台湾に派遣され抗日勢力の鎮圧にあたりながら台南で病没した北白川宮への感慨が述べられていることが多いです。

ところが、一九二〇年代になると、台湾での神社への言及が大幅に減少していき、北白川宮への言及もほぼ消滅します。一方で、一九三〇年代に



【図8】高雄神社鳥居（現況）

は、各地方の神社への言及が増加し、これは台湾の神社が内地からの日本人観光客にとって少し観光地化していく過程の反映かと思われます。ただし、そこには、訪問の事実は書かれても、北白川宮への想いを含めて感慨が記されることはほとんどありません。

全期間を通じて言えるのは、明らかに神社の近傍に行っても訪問しなかった（あるいは記録しなかった）ことが多いことです。その点で、台湾における神社が、書院生たちにとって訪問や記録に値するものにはなっていないかったということが伺われます。一九一〇年代には存在した北白川宮への感慨も、一九二〇年代以降は無感慨になり、内地からの日本人にとって、台湾領有はある程度、特別ではないこと、日常的なものとして捉えられていったように思われます。

八 大旅行を通じて見る学軍関係

最後に、大旅行の記録から、東亜同文書院と軍との関係についても観察しておきましょう。なぜなら、東亜同文書院には、時折「スパイ学校」としての評価が付きまとうからです。東亜同文書院は、日本の「スパイ学校」だったのでしょうか？

書院生の記録を見ると、たしかに一九一〇年代から一九三〇年代にかけて、大旅行で訪れた先において、日本軍の駐在武官を訪問したことが書かれています。「駐在武官」とは、在外公館に駐在して軍事に関する情報交換や情報収集を担当する武官のことを言うことが多いですが、中国にはこうした公使館付武官のほかにも、「諜報武官」とも称される外交特権の認められない参謀本部付の駐在武官も各地に置かれておりました。一九一〇年代にお

いては、書院生たちは、北京、雲南、長沙、鄭州、福州の各地において駐在武官を訪問しています。これは、この時代にこれらの都市において日本の駐在武官が活動していた証拠にもなりますね。駐在武官の研究は、これまで、実はあまり多くはないのです。一九二〇年代になりますと、雲南、広州・成都・張家口・鄭州、重慶、長沙、南寧、梧州の各地において駐在武官を訪問しています。地域的に一層の広がりが出てきました。一九三〇年代においては、一九三七年までは駐在武官訪問の記事が見られるのですが、一九三八年以降になると、駐在武官との接触に関する記述は激減します。一方、日本軍の警備隊や各地駐屯の実施部隊との接触に関する記述が出現し、それが地域的広がりを持ちますので、日中戦争下における日本軍部隊の広がりや、日中間の軍事的関係の変化が見て取れます。

一九四〇年代になりますと、書院生たちは大旅行で地方の町に着くと、まず憲兵隊、特務機関に挨拶に行き、それから警備隊や各実施部隊を訪問するようになります。書院生自らの安全のためにも、憲兵隊や特務機関からの情報収集や保護は重要だったと考えられます。また、軍務に就いている東亜同文書院出身の先輩への訪問も増加していきます。

これらの情報から、中国においては、一九三七年までは駐在武官は領事館等に並ぶ情報提供元であったことがわかります。駐在武官は、要人への紹介や、食事の招待、病気に倒れた学生の面倒など、様々な面で書院生の大旅行を支援しました。もともと、それは武官だけではなく、領事館等でも同様でしたので、東亜同文書院が軍のみと親密な関係にあったと考えるのは現実とは異なります。一方で、軍事機関も在外公館と並ぶ重要な情報提供元として自然に捉えられていたことがわかります。さらに、日中戦争が勃発すると、中国大陸が戦場になっていったために、軍との関係も変化していったのです。少なくとも大旅行から見ると、たしかに書院生たちは一定程度、軍との接触を持っていましたし、駐在武官等からの情報提供を受けたり、逆に情報提供をしたりもしておりますが、当時の日本におい

てはそれが通常の範囲であったとも言え、「スパイ学校」との評価は当たらないと考えております。

おわりに―『大旅行誌』の史料的价值

以上、今回の講演では、東亜同文書院生たちが残した大旅行の記録『大旅行誌』の記述を通して、書院生たちが二〇世紀前半においてどのようなアジアを見てきたかを、アラカルト形式で紹介してきました。落ち着きなくアチコチに飛ぶようなまとまらない話で申し訳ありませんでしたが、ここからは国際交流の現場に生きた日本の知識青年たちの経験や主観的な想いが、ある程度浮かび上がって見えてきたのではないかと思います。東亜同文書院生たちが残した『大旅行誌』は、一九〇〇年代から一九四〇年代までの約半世紀の期間を、通時的に観察できる稀有な史料であると言えます。また、公的な調査報告書とは異なり、書院生たちの私的・日常的な行動や赤裸々な感想に至るまで記述されている点で、非常に面白いとともに、日本の知識青年たちの行動と主観的な思いを物語る、しゃちほこ張った記念写真というよりは日常のスナップ写真の集積とも言えるような、貴重な史料でもあります。そのような特性から、『大旅行誌』は、日本人知識青年たちの目に映ったアジアを、立体的に浮かび上がらせる材料として活用できます。今後も、このような史料を楽しく読み解いていきたいと思ひますし、そうした人々が増えていただくことを願っております。本日はご清聴、ありがとうございました！

主要資料

・東亜同文書院『東亜同文書院大旅行誌』シリーズ（雄松堂出版オンデマンド、二〇〇六）

今次発表の種本

- ・加納寛編『書院生、アジアに行く』（あるむ、二〇一七）
- ・加納寛「東亜同文書院生の香港観察にみる「アジア主義」」（『文明21』四〇号、二〇一八）
- ・加納寛「東亜同文書院生が見た台湾の神社」（『塩山正純編』『二〇世紀前半の台湾』あるむ、二〇一九）
- ・加納寛「東亜同文書院生が見た仏領インドシナの日本人」（『文明21』四二号、二〇一九）
- ・加納寛「東亜同文書院生がみた二〇世紀前半の雲岡石窟」（『梅檀林の考古学Ⅱ』大竹憲治先生古稀記念論文集刊行会、二〇二三）

（編者付記） 本稿は、令和六年（二〇二四）七月六日の公開講演会「東亜同文書院生が見た二〇世紀前半のアジア」

（横浜市大倉山記念館ホール）の講演内容に、加筆修正を加えて成稿したものである。

参考文献（書籍になって入手しやすいものを中心に）

- ・青木澄夫「オランダ領東インド時代のスマトラ島メダンにおける一九一〇年代までの日本人社会の形成と変遷」（『貿易風』中部大学国際関係学部論集』八、二〇一三）
- ・石田卓生『東亜同文書院の教育に関する多面的研究』（不二出版、二〇一九）
- ・大倉精神文化研究所編『大倉邦彦の『感想』』（大倉精神文化研究所、二〇〇三）
- ・大島隆雄「アジア・太平洋戦争下における東亜同文書院の変容…いわゆる「評価問題」と「止揚の諸契機」に注目して」（『愛知大学史研究』二、二〇〇八）

- ・郭晶『東亜同文書院大旅行調査之研究』（愛知大学大学院中国研究科博士学位請求論文、二〇〇七）
- ・大学史編纂委員会編『東亜同文書院大学史』（滬友会、一九八二）
- ・戸部良一『日本陸軍と中国』（筑摩書房、二〇一六）
- ・藤田佳久『中国を越えて』（大明堂、一九九八）
- ・藤田佳久『東亜同文書院中国大調査旅行の研究』（大明堂、二〇〇〇）
- ・藤田佳久『東亜同文書院生が記録した近代中国の地域像』（ナカニシヤ出版、二〇一一）
- ・三好章編『書院生の見た日中戦争』（あるむ、二〇二二）
- ・本村弥佐一編『続・嵐吹け吹け』（滬友会、一九八〇）
- ・矢野暢『「南進」の系譜』（中央公論社、一九七五）
- ・湯山英子『東亜同文書院生の仏領インドシナ調査旅行』（『植民地文化研究』五、二〇〇六）